

国際天文学連合 IAU 総会 —1994 年ハーグ, 1997 年京都

1994 年 8 月 14 日から 27 日まで、オランダのハーグ市で IAU の第 22 回総会が開かれた。参加者は 66 カ国から約 1640 名、うち日本からは 55 名（同伴者を除く）であった。この総会で 704（うち日本人 37）名の新会員が認められ、会員総数は約 7,900（うち日本人は約 380）人になった。新しく選ばれた主な役員は、総裁 (president) が Lodewijk Woltjer（オランダ）、次期総裁（予定者）は Robert Kraft（USA）、事務総長（General Secretary）が Immo Appenzeller（ドイツ）、副事務総長（Assistant General Secretary）が Johannes Andersen（デンマーク）である。

会議はコンgres・ヘボーという名のヨーロッパでも最大規模の会場で行われた。これまでは、開催地以外の都市や近隣の国で総会に前後してシンポジウムが開かれていたが、今回は全部同一会場で開かれることになった。オランダ方式と呼ばれているものである。このため、総会の会期が 2 週間と長くなった。

前半の 15 (月) から 19 (金) 日までに開かれたのは、星の種族、連星系のコンパクト星、サブ・ミリ秒角分解能光学測定の日文学・天体物理学における目標、の 3 つ、後半の 23 (火) から 27 (土) 日までは、アレー技術とその応用の新展開、ビッグバンと宇宙背景放射の検証、わが銀河の未解決諸問題、の 3 つであった。それぞれ、半日単位で 8 セッションという大シンポジウムであった。この他に、委員会 (Commissions) の連合科学討論会が 20 会議、多数の委員会やワーキング・グループの会合などが、その合間を縫って開かれた。

このようなオランダ方式の結果については、今後詳しく議論されることになっているが、概して好評であった。これまでの総会に比べて科学的內容が格段に豊富になったからである。次回の総会にも基本的には受け継がれるであろう。

もうひとつの試みとして、現在設置されている 40 の委員会を統合していこうということが決められた。委員会は現在は No. 51 までであるが、その中には、使命を終えて欠番になっているものもある。しかし、これらの委員会の中には相互に学問的關係が深かったり、分野的に交わりのあるものが多い。それに、IAU は委員会単位で運営されているが、その大きさ（メンバー数）は大小さまざまである。そこで科学上の主題を中心にして、これらをさしあたり 11 の分科 (Divisions) に統合しようというわけである。その際、第 14 委員会（原子・分子データ）は特殊だから執行委員会直属とし、第 7（天体力学）、第 41（天文学史）、第 51（生物天文学）は分科に属さず、そのまま残ることになった。それぞれの分科には 5 ないし 6 人の評議員をおくことになる。その主な仕事は、シンポジウムなど科学上の活動に関する提案に対して、それを支持するかどうかを決めることである。このような分科組織は実験的なものと考え、委員会活動を次第に分科活動の方に移して行って、うまく行きそうだということになれば、最終的に組織として固めることになる。さしあたりは委員会と分科の二重システムになる。

開会式典といくつかの提案が行われる開会総会は 17 日 (水) の午後開催されたが、ベアトリックス女王が臨席された。そして IAU 75 周年を期して Adriaan Blaauw によって執筆された、「IAU の歴史—その誕生と最初の半世紀」と題する書物 (History of the IAU, Kluwer Academic Publ., 296 pages) が女王に贈呈された。

いろいろな決議や新役員の指名をする閉会総会は、24 日 (木) に行われた。その際、日本天文学会と IAU の日本国内委員会（日本学術会議天文学研究連絡委員会が兼ねている）を代表して、次回の IAU 総会を 1997 年 8 月 17～30 日、京都国立国際会館に招待するという演説を行なった。これは 1992 年に IAU に招待状を送り、双方で準備を進めてきたものである。

京都総会の準備は天文研連の中に置いた準備委員会で細々と続けてきたが、いよいよ本格的に始めなければならない。それには2つの面がある。総会そのものを実行することと、それを機会に日本から近隣諸国まで含めて、天文学研究の活力や雰囲気盛り上げることである。今期の天文研連は去る9月20日に発足したが、天文学会と協力して新しく組織委員会を作る。そして総会の実行は組織委員会、雰囲気盛り上げは天文研連と天文学会が中心になって行なうことになっている。

総会そのものについては、日本天文学会と日本学術会議とが共同で主催する予定で、12月9日までに学術会議へ申請する。共同主催が認められると、総経費のうちの一部が予算化されるとともに、学術会議の開催する会議として、いろいろな便宜が受けられることになる。

組織委員会にはなるべく若い研究者に参加していただき、その世代の意見ややりかたが反映されるようにしたつもりである。日本からのIAU総会への参加者は、このところ平均年齢がかなり高いので、この機会に若い世代が積極的に参加できるようにしたいものである。IAU自身も若い世代の参加を歓迎しているが、科学上の活動を高める方向へ総会形式を変更したことによって、若い世代の参加は伸びつつある。

これに関連して、オランダ総会のときに思った問題がある。総会で決められた次期の委員会委員長には、日本からは2名、副委員長には1名しか選ばれていない。この数はこのところ減り気味である。副委員長は次期の委員長になるのが普通だから、次期はさらに減ることになりかねない。それに新しく始まった分科の評議員はこれまでの委員会から選ばれるし、IAU全体の執行委員会などの役員を指名する委員を推薦するのは、各委員会の委員長である。若い人たちがさしあたりの研究に忙しく、IAUのことに関わっている時間の余裕がないと思うのもよく分かるが、国際組織のなかで学問を進めていくためには、IAUの活動に積極

的に参加していくことも大切である。

天文学の活力を高めるとことについては、いろいろな事が考えられるが、なかでも、どのようなシンポジウムを計画するかは、最も大切なことのひとつであろう。東アジアでIAU総会が開かれるのはこれが最初であるから、オランダ方式は少し緩めて、総会前後に近隣諸国に於てもシンポジウムが開けるようにしたらどうかということが考えられた。このことについては、前期の天文研連からIAU執行委員会に提案し、オランダ総会中の執行委員会でも説明した結果、そうしてもよいと認められた。オランダ方式そのものがまだ実験段階だからである。ただし、そのようにして、総会そのものへの参加者が減少することがないように考えて欲しいとのことであった。

京都でのシンポジウムは日本の研究者が主体的に参加しやすいよう、そのテーマを考えるのが良いという意見が、前期の研連で出されていた。ただ実際には、誰かが国際的に科学組織委員会(SOC)を作って、複数のIAU委員会または新しい分科に提案し、支持を得てからIAU副事務総長をとおして執行委員会に提案することになる。オランダ総会での6つのシンポジウムでのトピックスの広がりを見ると、多数の提案が6つにまとめられたように思える。このような経過のなかで、どのように提案し、国際的な競争に勝っていかにかについては、提案者自身が国際的な場で努力していく必要がある。

提案の時期について副事務総長と話したところ、次のようなことであった。オランダ総会時の執行委員会では、1995年のシンポジウムだけでなく、1996年の分も一部は決められた。だから、1997年総会時のシンポジウムは、1995年6月の執行委員会に提案しても早すぎることはない。この他にも、雰囲気盛り上げるために、いろいろとやるべきことがあるだろう。関係委員会は皆さんの意見と積極的な参加を待っている。

杉本大一郎(東大教養、前期天文研連委員長)